町医者だより

平成25年09月号

＜発行・お問合せ先＞
おおわだ内科呼吸器科
院長　大和田　明彦
市川市南八幡４－７－１３
ｼｬﾝﾎﾟｰﾙ本八幡２階
ＪＲ本八幡駅南口(シャポー改札口)
２分ミスタードーナツ並び
ヘアサロンAsh向かいビル2階
電話０４７-３７９-６６６１

おおわだ
内　科
呼吸器科

すべての喘息児に吸入ステロイドを

喘息の治療、特に子供さんの治療には保護者の意見がどうしても優先されてしまいます。人間誰しもそうですが症状がなくなれば治療をやめてしまうかもしれません。今回紹介するのは久保　裕先生という和歌山で開業されている先生の体験談です。先生は2歳から喘息を発症し、いろいろな特効薬を試してこられましたが、喘息のコントロールができず肺炎や気胸を繰り返して、呼吸機能が低下し慢性呼吸不全となって現在酸素を吸入しながら診療に従事されています。先生が40歳のとき吸入ステロイドに出会って、吸入ステロイド抜きの治療が過少治療（アンダートリートメント）であったとして、吸入ステロイドの治療の普及に努めています。要約を無断でここにあげさせていただきますが、先生の体験談の本文を是非お読みください。インターネットで読むことができます（NPO法人「日本アレルギー友の会」を検索。右の「喘息・アトピーを越えて笑顔の声」クリック、「気管支喘息の体験談」クリック、上から7人目「吸入ステロイドと私ー患者として、医師として」）　。

喘息の特効薬をもとめて

1951年生まれの先生が、喘息を発症したのは2歳のときで、発作のときはボスミン（アドレナリンの事で食物アレルギーのアナフィラキシーショックのときに使用するエピペンは同じ薬です）やネオフィリン（当院でも喘息の調子の悪い時に点滴で使用しています）の注射をしていたそうです。小学2年生のとき初めてメジヘラーを使用したと書いています。このメジヘラーは、メプチンやサルタノール吸入と同じ短時間作用ベータ2気管支拡張剤です。吸入すると発作が嘘の軽くなるが、強い発作のときは10分くらいしか効果がなくて大学2年生のとき使いすぎで脈が速くなって身動きが取れなくなり、下宿先のおばさんに助けられたエピソードを上げています。いろいろな薬剤療法、民間療法を試したが効果がなかったことが書かれています。

喘息はコントロール可能な病気

大学を卒業して呼吸器内科の臨床医として働き始めます。このころの喘息治療について以下のように述べています。「ネオフィリン薬のRTC療法（毎日朝晩同じ時刻にきちんと内服し1日中一定の有効血中濃度に保つ治療法）や漢方薬、吸入ベータ刺激薬のレギュラーユーズ（メプチンやサルタノールを1日4回とか決めて定期的に吸入）、そして続々と発売される経口抗アレルギー薬、　80年代　私たち臨床医は喘息治療の「流行」に翻弄されていました」。1990年にアラバマ大学のベイリー教授が書いた喘息解説書を日本語版として出版し、海外では80年台から患者さんに説明されていた「喘息は治らないが、適切な治療によってコントロールできる」こと、「治す」「治る」ではなく「コントロール」という概念を日本に拡げようと努めていきました。

吸入ステロイドとの出会い

1991年入院していた京都大学病院の病棟を無断で抜け出して聞きに行った講演会で、「喘息の本態は気管支の炎症であり、吸入ステロイドが第一選択薬であること、吸入薬の方が経口薬よりも副作用が少ないこと、薬の効果を高める上で吸入指導が不可欠なこと」などを学び、以後吸入ステロイドの普及を目指しています。

息あるうちは

先生は自分の小児期を振り返って喘息の治療が明らかに過少治療（アンダートリートメント）だった。当時は吸入ステロイドがなかったからだ、と断言しています。そして今回の町医者だよりのタイトルにさせていただいたように「全ての喘息児に吸入ステロイドを」願わずにはいられないとしています。